◎東京湾奥葛西橋発↓木更津沖

パターンをつかめば連釣 難敵タチウオ浅場で順調

本誌APC(東京)／鈴木良和 Yoshikazu Suzuki

「難敵」という言葉を聞くと釣りバカの私はカワハギやフグ、タチウオを思い浮かべてしまう。これらの魚の共通した特徴は、ホバリングして海中で静止できる点だ。

この姿勢からカワハギやフグはアタリを出さずにエサを失敬してしまうが、タチウオはアタリは出すもののなかなかハリに掛かってくれない。

それはタチウオのエサの捕食方法にある。鋭い歯でエサに何度もかじり付き、徐々にダメージを与えて瀕死の状態になったところでようやく飲み込む。そんなエサの食べ方だから、最初のコツコツしたアタリに合わせてもハリ掛かりしない。その後の、バクッと食い込んだアタリで合わせる必要がある。

▲東京湾のタチウオはいよいよ冬モード

ボクシングに例えるなら、コツコツとジャブを打ち込んだ後にガツンととどめのストレートを打ち込んできたところをクロスカウンターで仕留めるイメージで合わせを入れるわけだが、このバクッとくるアタリの見極めが極めて難しい。

私見ではあるが、東京湾には釣りで散々攻められた結果、警戒心の強い個体のDNAを受け継いだ用心深いタチウオが多い気がする。だからエサ付けが雑だったり誘い方がマッチしていなかったりすると違和感を察知してソッポを向いてしまうのだ。

逆にいうと、そんな難敵だからこそヒットパターンをつかんで掛けられたときの満足感は高く、それを味わってしまうとこの釣りにドップリとのめり込んでしまう。

そんな難敵のタチウオと対戦すべく11月16日に東京湾奥葛西橋の第二泉水へ出かけてきた。

アタリはあるけれど…

人気のタチウオ釣りだが、取材日は平日とあってか乗船者は私を含めて7名と少なめ。そこでカワハギ船担当の黒澤船長も乗船、手伝いの合間に竿を出すという。

6時半に出船して1時間ほどで到着したのは木更津沖の水深20メートル前後。湾奥出船のタチウオ船はこのところこの浅場を中心に狙っており、トップの釣果は10～20本といったところだ。

「水深は20メートル。タナは海底から3～5メートルです」と小倉船長のアナウンスで仕掛けが投入される。この日は全員テンビン仕掛けで、水深が浅いことからオモリは40号が指示された。

ちなみに船長たちにタチウオの攻略法を伺うと、口をそろえて言うのが「1にていねいなエサ付け。2に誘いのパターン。3に合わせのタイミング。4に根気」とのことだ。

1投目から右舷ミヨシ2番の堀川さんがヒットさせる。竿を激しくたたかれながら90センチのタチウオを抜き上げると、左舷ミヨシの宮崎さんも85センチのタチウオを釣り上げた。

間を置かずに黒澤船長もタチウオを釣り上げたのだが、ほかの人はアタリは頻繁にあるもののなかなか食い込んでくれないらしく困惑顔。

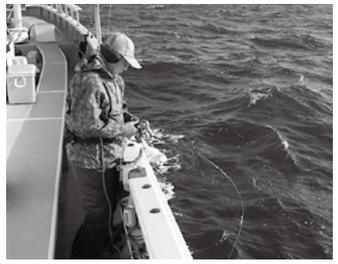
そんな中、堀川さんだけはポンポンと一気に3本も釣り上げてしまった。釣り方は小気味よい誘いではなく、ユラユラとゆったりした誘い方でポーズの時間も長い。

どうやら今の時間帯はジックリとエサを見せるのがヒットパターンらしく、そのことを船内に告げて回ると左舷の田村さんが「ようやく釣れました」と笑顔を見せればお友だちの那須さんも「俺も釣れました」と写真に収まってくれた。

だが徐々に魚信が遠くなり、固まっていた船団も散り散りとなってしまう。

突然アタらなくなった

小倉船長も9時半に移動を告げて水深22メートルラインへ。タナは同じく海底から3～5メートルの範囲だったが、ここではいきなり右舷3人に同時ヒット。左舷でも遅れて2人がヒットさせて一気に船内が活気づく。


▲誘いが合えば連チャンさせられる

それまで負のスパイラルに突入して大苦戦していた右舷トモの常連の熊澤さんが、「ようやくパターンが分かったよ」と3連チャンさせると、「左舷のミヨシでちょっと型のいいのが上がったよ」と船長から声がかかった。

行ってみると宮崎さんが105センチのタチウオを釣り上げていた。

写真撮りも進んだことから10時半から私も竿を出す。

ゆっくりとした誘いを繰り返しているとコツンとアタリ。一呼吸置いてから聞き上げるとムッと穂先を押さえ込むような負荷が加わったので大きく竿をあおって合わせを入れるとガガガッと見事にフッキング。90センチのタチウオを釣り上げた。

次投は誘いを入れているとまるでオマツリでもしたかのようにフワフワと穂先が浮き上がった。これはタチウオが食い上げた証拠なので急いでリールで巻き合わせるとギュンギュン。力強い引き込みを楽しみながら同級のタチウオを抜き上げる。

この調子でいきたいところだったが、突然魚信が途絶えてしまう。

「潮止まりですか?」と船長に聞くと、

「濁り潮が入ってきて、タチウオの反応はあるけど食い気がなくなったみたい」と弱り顔。海面をのぞき込むと今までいなかったミズクラゲが大量に押し寄せている。

船長は食い気のあるタチウオを求めて潮回りを繰り返してくれるのだが、なかなか好転せずにポツリポツリとタチウオが釣れ上がるといった渋い状態が続く。

私もあの手この手を駆使して2本を追釣したところで沖揚がりの時間を迎えた。

釣果は80～105センチのタチウオが2～11本。最後の渋い時間帯にコンスタントに釣った熊澤さんが竿頭になったので、

「あの渋い状況をどうやって攻略したのですか?」と聞くと、

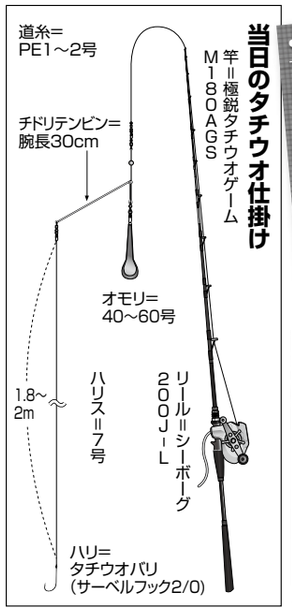
「竿をまったく動かさないでいると小さなアタリが出て、そこからジリジリとアリが這うぐらいの速さで竿を立てていったら食い込んだ」とパターンを教えてくれた。

時合ではガンガン食ってくるのに、実にタチウオは気難しい魚だと痛感した次第。東京湾のタチウオのシーズンはまだ続く。あなたも難敵に挑んでみてはいかがですか。

▲80～90センチが多かった

▶タチウオは難しいから面白い

当日のタチウオ仕掛け



•Tackle Guide

竿はタチウオ専用のほか7：3～8：2調子のライトゲームロッドも流用できる。道糸は太くても2号まで。オモリは浅場を攻める場合は40～60号。ハリスは全長1.8～2メートルの1本バリが基本だ。

▼この日はゆっくりした誘いがよかった様子

知っ得! Tips and Tricks

鋭い歯にはご注意を

タチウオにかまれるとなかなか血が止まらない。それはタチウオの歯がガラスのように切れ味鋭く、テーパー状になっているため思った以上に深く刺さり込み、傷口が癒着しづらいからだ。そのため水に強いタイプの絆創膏と魚つかみは必需品だ。釣りの最中だけでなく、家に帰ってタチウオを取り出そうと無造作にクーラーに手を突っ込んでザックリとやってしまうパターンもあるのでご注意を。

◀歯に少し触れただけでもスパッと切れてしまう

◎船宿information

小倉 裕士船長

東京湾奥葛西橋
第二泉水
☎03・3645・2058
(詳細は巻末の情報欄参照)

▶料金=タチウオ乗合一人1万500円(付けエサ、氷付き)
▶備考=出船6時半、14時沖揚がり。無料駐車場あり。ほかライトアジ、カワハギへも

●すずき　よしかず／居間のテレビのチャンネル権を女房殿に握られてから早寝早起きが習慣になりました。おかげで体調は極めて良好。ありがたいことです。